

## 内村鑑三

—平和といのち—

葛井義憲

### はじめに

小論を展開する前に、故村瀬豊スポーツ健康学部長との関わりを綴っておきたい。先生と小生は2006年4月に本学瀬戸キャンパスに誕生した人間健康学部の開設準備と開設後の運営にあたって協働した。先生は緻密に本学部発展・充実の計画を練り、進め、多難な教務を引き受けられた。そして本学部のさらなる発展を期して、2010年4月に本学部を2学部に分割し、新しいスポーツ健康学部の学部長に就任された。きめ細かやで、配慮の人である先生は学生からも、教職員からも信頼された。小生も、先生の傍らで、先生の希望がかなえられ、この学部が大きく発展することを願っていた。しかし、2011年4月2日、スポーツ健康学部の2回目の入学式を終えた翌日、先生は天へと召されていった。

先生の面影は小論を執筆中も浮かび上がる。小論は本学の前身、名古屋英和学校で勤務した内村鑑三の「平和といのち」論について展開される。内村が名古屋英和学校に勤務した時(1896年9月—1897年1月)は窮状の中で聖書をもとに思索を深め、「小さく、弱き人たち」に慰めと希望を語り、国家に平和と非戦を求めている。まだ、東京の万朝報社に入社し、華々しい言論活動、社会改良活動などを行う前であった。しかし、この不遇の時代に味わった苦難・試練がその後の目を瞪る彼の活躍の準備・

訓練となったことは間違いない。小論は共著『内村鑑三』と出会って』(勁草書房、1996年)に載せた「天国、家庭、女性たち」、『初期社会主義研究』17号(特集、非戦)(不二出版、2004年)に掲載した「内村鑑三の平和への祈念より」を継承・補完し、さらに、日露開戦前夜から戦後までで掴んだ「戦争の害悪」「いのちの尊さ」について考究したものである。

内村は実体験を重視する人、実証的にものごとを考える人、実存をかけて実践する人であった。小論はそうした彼のあり方、生き方から上る彼の内的叫びにも耳を傾け、その叫びの内容をも分析して論じたものである。

### 一 加寿子の存在

内村加寿子が天へと召されたのは暗雲が内村夫妻にたれこめていた1891(明治24)年4月19日であった。この年の1月9日、内村は教育勅語に署名された明治天皇の親筆に最敬礼を怠ったとの理由で、国賊、不敬漢と非難され、また、囑託教員として勤務していた第一高等中学校を追われる(同年2月3日)という出来事(「不敬事件」)に見舞われた。そしてこの事態の最中に、鑑三は悪性のインフルエンザにかかり、意識不明に陥った。

妻加寿子は重態の夫を献身的に看病し、また、抗議に訪れる者たちから発せられる罵詈雑言を夫に代わって聞いていた。こうした彼女の

手厚い看病，身を挺しての防御の結果，鑑三は平癒していった。しかし，加寿子は夫の全快に代わって風邪をひき，僅か1年9カ月の結婚生活であった4月19日に天へと召されていった。これは内村にとって痛恨の極みであったろう。友人ストラザース (Alfred L. Struthers) にあてた書簡 (1891年7月9日付) で，「ただ一人の女は世界の歴史に大いなる価値をもたらさないだろうが，一人の男にとって，この真実なる妻を亡くすことは全世界を失うのに等しい」(『内村鑑三全集』36岩波書店，1983年，339頁) との文章をもって，悲しみを表わしている。加寿子の死は内村を救うための身代わりの死と彼には思われた<sup>1)</sup>。

加寿子と結婚したのは1889年7月31日であった。この年の8月20日付のストラザースたちに宛てた書簡は彼女の境遇・性格などを記している。彼女は鑑三の郷里高崎での幼馴染，横浜加寿子であった。彼女は鑑三の少年時代，彼が英文法の初歩を暗記する時，「[鑑三の] 傍らにすわる貴婦人のような少女として記憶している—I remember as a lady-like girl sitting beside me—」(『内村鑑三全集』36，317頁)，とストラザースたちに知らせている。

彼女は苦労人であった。複雑な家庭環境に育ち，6人の継母に仕え，内村の最初の妻，浅田タケのような学歴のある知識豊富な女性でなく，貧困，死別，理不尽なことなども体験し

た人であったが，編み物，料理などの家事に秀で，正直で，思いやりがある性格であり，夫鑑三に貞淑に仕える人であった。こうした境遇によって練り上げられた謙遜な，思いやりにあふれた人格は「誠実なるキリストの弟子の妻として必要なあらゆる条件—all the conditions necessary for a wife of a sincere disciple of Christ— (同頁)」を備えていると内村には思われた。

彼は米国から帰国 (1888年5月) 後の明治20年代，キリスト教をもって日本の発展改良に寄与したいとの大望 (ambition) を抱き，それを具現化するにあたり幾つかの試練苦難と向き合うことを体験した。彼はアメリカからの帰国後の1888年8月，新潟にあるキリスト主義学校北越学館の「仮教頭」に就任した。しかし，当該校で中心的な役割を担う宣教師たちの教育姿勢，「欧化主義の風潮」を利用して「欧化的基督教教育」をもって人間形成，教科教育を行うことに対し全面的に肯定・受容することができず，同年12月に退職した。彼は信頼する友，ベル (David C. Bell) にあてた1888年11月25日付の書簡で，「[現在の日本の欧化主義的風潮のもとで，日本国民は] キリスト教に対してさえも，本来の倫理的，精神的価値のためでなく，西欧の宗教であるが故に求めようとしている」(同書，307頁) と慨嘆している。続けて，キリスト教は日本に必要であり，それが外国人の手で蒔かれたとしても，「この日本に育ち，この日本の流れ (stream) にぬらされ，この日本の胸にて養育されるもののみである」(同書，307-308頁) べきだと述べている。そして彼はベルに，かかる考えを有す「自分は極左の愛国的キリスト教信者 (The Patriotic Christian of the Extreme Left)」だとも伝えている (同書，308頁)。

1) 内村鑑三著『基督信徒の慰』(『内村鑑三全集』2所収) 岩波書店，1980年，73頁。  
この著書の中扉に，「明治二十四年四月十九日所謂『第一高等中学校不敬事件』の後に，余のために其生命を捨し余の先愛内村加寿子に謹んで此書を献ず，願くは彼女靈天に在りて主と偕に安かれ。」と記述されている。また，この書は加寿子にささげられたものでもある。

米国帰りの内村は北越学館での「仮教頭」職体験の中で明瞭に「基督と愛国（Pro Christo et Patria）」（同書、325頁）の二つの旗を等しく掲げて活動することの意義を知らされた。そしてこの二つの旗をかかげることによって衝突・対立が生じて、この「基督と愛国」（これを簡略化したものが「二つのJ」（イエスと日本））をもって思索・教育・言論活動を進めようとした。しかし、この二つを等しくかかげて行う実践は当然、「欧化主義」を求める宣教師、他方、拝外的な「日本精神」主義者両方と衝突・対立することを避けることはできなかつただろう。加寿子と結婚した後に就いた第一高等中学校（1890年9月に同校囑託教員として就任）での「不敬事件」は「愛国者」内村が信仰する「基督」の故に生じたものであった。

しかしそれでもなお、彼は「基督と愛国のため」の旗を掲げて、明治20年代の日本で活動を継続するためには、孤立を厭わず、さらに、加寿子のような、忍耐力があり、苦勞を嫌わず、徹底して夫を信頼し、支え、誠実に、正直に生きる伴侶をも必要とした。しかし、この「伴侶」必要論は加寿子のような女性に「甘える」、男性のエゴイステックな姿を如実に表わしている。けれども、内村には、かかる従順で、犠牲的な支え主が求められた。

## 二 「来世（天国）」について

「不敬事件」後は加寿子の優れた人格に圧倒されていった。内村は加寿子の病床での様子などを1891年7月9日付のストラザースに宛てた手紙に記している。加寿子は病床にある3カ月間、彼女の口から一言の不平ももれず、夫鑑三と病床で一緒に祈る時、彼女は鑑三のこと、彼女の父のことを祈り、自分自身についてのこと

は一言も祈らなかったと言う。こうした柔和で、徹底した自己犠牲の加寿子が帰天（1891年4月19日）の5日前、鑑三の友人である組合派の本郷教会牧師、横井時雄から洗礼を受けた。この洗礼式は内村に感銘を与え、洗礼式の中で発した彼女の力強い「アーメン」と唱える声は耳に残り続けている—Her emphatic Amens are still audible in my ears. 一と、ストラザースに伝えている（同書、338頁）。

世間から指弾の標的とされた「不敬事件」を挟んだ加寿子との心温まる結婚生活、そして彼女とのこの世での別離は内村を打ちのめし、孤独にさせる—I am now a greater stranger in this my own land than I ever was in America.（同頁）—反面、彼に「来世」に対する強い関心を抱かせるようになった。加寿子死後、1年数カ月経って綴った「未来観念の現世に於ける事業に及ぼす勢力」（『基督教新聞』475-476号所収、1892年9月）の末尾に「来世への希望」を開示している。

現世は価値なきものにはあらざれ共永遠の価値を有するものにあらざるなり、人類は現世を楽しみ得べきも未来の希望を有せずして楽しみ得べきものにあらず、余輩基督信徒たるもの時勢を利用する事あるとも何んぞ時勢の子供となるべけんや、基督の贖罪、未来の存在、共に余輩の頼むべき大盤石にして世の之に対する思想は如何に変化するとも余輩の之に対する信仰と希望は昨日も今日も明日も変ずべからざるなり。（『内村鑑三全集』1岩波書店、1981年、308-309頁）

内村はアマスト大学留学時代（1885年9月—1887年7月）に親しく教えを受けた総長シーリー（J. H. Seelye）から贖罪信仰に目を開かせられ、また、加寿子の死から「復活」「来世（天

国)」に対する確信をもたらされた。彼は彼女の死の直後、「妻の柩を送りて詠める」と題して和歌一首を『基督教新聞』405号(1891年5月)に寄せている。その和歌は受洗して亡くなった妻にささげた「鎮魂歌」であった。

春の日に栄の花の衣きて/心うれしく帰る  
故郷 (同書, 195頁)

寂寞をおさえて、「天国」を仰ぎ見、神のもとに一人帰る加寿子のことを、内村は祈り、詠う。そして「天国」は彼にとって「観念」でも、「絵空事」でもなく、現実具体的なものとなり、また、近しき世界となっていく。

彼は1893(明治26)年に刊行された『基督教徒の慰』の第1章「愛するものゝ失せし時」の中でも、「余は天国と縁を結べり、余は天国てふ親戚を得たり」(『内村鑑三全集』2, 16頁)と喜びをもって語っている。内村は加寿子の死により、死の意味を聖書に聞き、また、神に祈る中で、「復活」「来世」への信仰を強め、そしてそこから「現実の世界」を見つめ、「現実の世界」とキリスト者との関係を捉えようとしていた。

また、1903(明治36)年10月、日露開戦に反対し、非戦論を唱える事態のもとで脱稿された「来世は有耶無耶」(『聖書之研究』45号所収)の中で以下のようなことも述べている。

私は世に誤解された時に最も明白に来世の存在を認めました。(中略)私は其誤解を取り去らんために私の知る総ての方法を竭しました。然し其全く無効なるを知りまして、一時は非常に失望致しました。然しながら聖書を読み、殊に〔ヨハネの〕黙示録を読みまして、斯かる誤解の生涯が基督信徒の生涯であることを悟り、それと同時に神が私共により善き国を備へ給ひしを知りまして、私の涙は始

めて拭はれました、私は眼に涙を湛えずして未だ嘗て黙示録の第廿一章を読んだことはありません、

神、彼等の眼の<sup>なみだ</sup>涙を悉く拭ひとり、復た死あらず、哀み痛み有ることなし、  
蓋前事<sup>そはまへのこと</sup>すでに過去ればなり(第四節)。

嗚呼、是れ有れば足りるのであります、(中略)来世の希望が私に供せられた時に私は始めて氣息を吐いたのであります、此時に始めて私は人らしき人と成つたのであります、其時から宇宙も人世も私には楽しきものとなりました。(『内村鑑三全集』11岩波書店, 1981年, 458-459頁)

「不敬事件」に遭遇し、朝野をあげて指弾され、また、日露開戦を前にして、非戦を唱える内村はヨハネの黙示録から窮状に置かれる意味とそれを超えて示される神の平安を掴んだと言う。眼に涙をためて読むヨハネの黙示録は世間から「誤解」を受ける内村に多くの教示と恵みを与える内容を蔵していた。この黙示録は、ローマ帝国の支配下にあるキリスト信徒がローマ世界の神々礼拝を拒む中で、ローマ帝国から「反共同体的・反社会的分子」と見なされ、迫害される紀元1世紀後半の事態を背景にして、神の審判と神の勝利、天上での神とともにあるキリスト信徒の至福の生活、一切の悲嘆から解放された来世での生活を象徴的表現を用いて、黙示文学的に描いた書である<sup>2)</sup>。

内村はこの黙示録を通し、異教世界で生きる

2) T, F, Glasson, The Revelation of John, Cambridge University Press, 1965, pp. 7-15. 矢内原忠雄著『聖書講義』IV岩波書店, 1978年, 558-559頁。  
弓削達著『ローマ皇帝礼拝とキリスト教徒迫害』日本基督教団出版局, 1984年, 92-145頁。

キリスト者がこの世で受けねばならない試練・苦難の意義と試練・苦難によって知る「来世(天国)」を確かに掴んでいった。内村は言う、「辛い生涯の経験に遭はざれば来世は瞭かに見ゆるものではないと思ひます」(『内村鑑三全集』11, 459頁)と。

加寿子の死とその後の祈り、聖書に基づく思索・実践によって確かなものとした「来世(天国)」は他方、鑑三を益々「現世」へと向かわしめ、この世の救いのために果たす彼の信仰活動の重要性を明らかにさせていった。彼は東京独立雑誌社より発行された『宗教座談』(1900年4月)で、「基督信徒とは(中略)其柔和なる事小羊の如く、其猛き事獅子の如く、其天真なる事小児の如く、謙遜にして亦た剛毅、涙脆くして亦た勇敢、情に篤くして亦た之に勝つの力を有し、使徒保羅〔パウロ〕の申しました『総ての事、是れ信じ、総ての事はれ忍ぶ』[コリント前書13・7]者であります。爾うして天国とは実に斯う云ふ者の行く処を云ふので御坐います」(『内村鑑三全集』8岩波書店、1980年、188-189頁)と語っている。

イエスが十字架で死んで表わされた贖罪の恩寵は罪びとの人間を「凡そ事忍び、おほよそ事信じ、おほよそ事望み、おほよそ事耐ふる」(コリント前書13・7)者に変えしめるとともに、「来世(天国)」に対する確信は彼らを一層大胆にキリストの愛、神の義を「現世」で証しする存在に作りかえるのだ、と内村は捉えた。『宗教座談』に収められた「永生」論で、「永生とは(中略)基督に顕はれたる神の生命を信仰を以て我が心に受ける事で御坐います」(同書、181頁)と語り、また、「永生とは神を知り、神の遣しゝ基督を知る事(中略)之を言ひ換へて見れば基督に顕はれたる神の愛を信仰を以て我が靈魂に同化すると云ふ義であります」(同

書、178頁)と述べている。「永生」とは永遠の命という意味とともに、キリストの愛が罪びとであったキリスト者からあふれ出ることをも表わすものだ、と内村は理解した。このことは言い換えるならば、「神の靈我が心(=靈魂)に宿<sup>3)</sup>」ったキリスト者(=内村)がこの世の旅路を「復活のキリストと一体」となって、しかも、ナザレのイエスに代わって、神の義と愛を謙遜に、剛毅に顕わしつづけることである。

加寿子の死とその後の信仰的思索・実践は鑑三に「来世(天国)」を近しき世界と実感させるとともに、神の義と愛をこの世に顕わすことの意義をも教えていった。それ故、鑑三は「不敬事件」の2年後に発行した『基督信徒の慰』の中の一文を信仰者である妻加寿子からの遺言と捉え、誠実に受けとめようとした。

一日余は彼の墓に至り、塵をひひ花を手向け、最高いとたかきものに祈らんとするや、細き声あり一天よりの声か彼の声か余は知らず一余に語て曰く「汝何故に、汝の愛するものゝ為めに泣くや、汝尚ほ彼に報ゆるの時をもおも機をも有せり、彼の汝に尽せしは汝より報を得んが為めにあらず、汝をして内に顧みざらしめ汝の全心全力を以て汝の神と国とに尽さしめんが為めなり、汝若し我に報ひんとならば此国此民に事へよ、渠かの家なく路頭に迷ふ老婦は我なり、我に尽さんと欲せば彼女に尽せ、渠の貧に迫められて身を耻辱の中に沈むる可憐の少女は我なり、我に報ひんとならば彼女を救へ、渠の我の如く早く父母に別れ憂苦頼るべきなき兒女は我なり、汝彼女を慰むるは我を慰むるなり、汝の悲歎後悔は無益なり、早く汝の家に

3) 『内村鑑三全集』8, 491頁。

かえ  
 販り、心思を磨き信仰に進み、愛と善との業を為し、霊の王国に来る時は夥多の勝利の分捕物を以て我主と我とを悦ばせよ<sup>4)</sup>。」

### 三 平和の福音宣伝 —おわりにかえて—

箱根芦の湖畔で、1894（明治27）年7月、基督教青年会の主催で開かれた第6回夏期学校（校長、海老名弾正牧師）の講師の一人に内村鑑三がいた。日清戦争開戦前の、殺気が社会に満ちる中での開催であった。内村は当該夏期学校に参加した青年たちに語りかける。「私の心に清い慾が一つある。私に五十年の命を呉れた此美しい地球、此美しい国、此美しい社会、此我々を育てゝくれた山、河、是に私が何も遺さずに往つて仕舞ふのであるかと云ふ考です。（中略）私は茲に一の何かを遺して往きたい。（中略）唯々私が地球を愛し、私はドレ丈此世界を愛し、ドレ丈同胞を思つたかと云ふ紀念物を置いて往きたい」（『内村鑑三全集』4岩波書店、1981年、254頁）と。

『後世への最大遺物』（便利堂、1897年）として上梓されたこの講演は地球・自然・人類・日本国・日本国民への愛とその発展・平和に少しでも寄与したいとの思念を伝えている。内村が箱根で講演した1894年7月は京都で執筆活動を行い、『伝道之精神』（警醒社、1894年2月）、『地理学考』（警醒社、1894年5月）などを矢継ぎ早に刊行していた。しかし、彼は窮乏の日々を過ごしていた。「不敬事件」で、第1高等中学校を追われ、加寿子を亡くした後、

4) 『内村鑑三全集』2、14頁。

幼馴染であった加寿子は高崎藩士、横浜恕の娘である。

『内村鑑三全集』36、317頁。

不敬漢として指弾される内村は大阪の泰西学館（校長、宮川経輝牧師）、熊本の熊本英学校（校長、蔵原惟郭）などのキリスト教学校でわずかな期間だけ勤務し、1893年7月より住居を京都に移し、著述などで生活しようとしていた。そしてこの間に、裁判官岡田透の娘静子と結婚（1892年12月）し、1894年3月には、ルツが誕生した。貧困と世間からの排斥の中で、内村は静かで、平安な時を新しい家庭に見出していた。ベルに宛てた1893年1月11日付の書簡で、彼は静子について述べている。「[静子]は私の生活全般に新たな恵みを加えてくれる。彼女の名は平和を表わす「シズ」である。そして名前通りの人物である。」（『内村鑑三全集』36、366頁）と。ここに、「柔和、従順」な妻を迎えた彼の喜びが綴られているが、しかし、辛苦の日々は消失することはなかった。けれども、彼は世間からいかに指弾され、苦難に置かれようと、「基督と愛国」をかかげて、日本とその国民の平和・幸福に寄与しようとする。

内村は箱根から京都へ戻った後に始まった日清戦争を義戦だと見なし、その戦争を支持するとの表明を行った。1894年10月に刊行された『国民之友』237号に掲載した「日清戦争の目的如何」で、彼は「吾人の目的は文化を東洋に敷き永く其平和と進歩を計るにあり、而して東洋の平和は支那を活かすより来る、是れ実に日清戦争の大目的ならずや」（『内村鑑三全集』3、142-143頁）と述べ、「吾人〔日本〕は亜細亜の救主として此の戦場に臨むものなり」（同書、144頁）と綴る。ここには、日清戦争をもって東洋の平和に貢献する「文明国」日本への期待と、「亜細亜の救主」の役割を担う日本人であることの自負が表わされている。

この論説発表から20年ほど経った1914年7月から8月にかけて、内村は神奈川県浦賀町で

開催された基督教青年会第24回夏期学校で、20年前の第6回夏期学校を回顧して、日清戦争支持に至る思いを述べた。

私が日清戦争に賛成した第一の理由は支那をして朝鮮の独立に干渉する事なからしめ朝鮮に完全なる独立を与へ、支那も独立を益々鞏固にし（中略）[さらに]東洋の和平を得んとするに在つたのである。（『内村鑑三全集』21岩波書店、1982年、503頁）

彼は、「文明国」日本、謙遜で、独立・自由を「大事にする」日本人が清国に勝利することで、朝鮮をはじめとするアジア（清国も含まれる）の独立・開明は進められ、また、そこに生きる人々が平和と進歩を手にする好機となるだろうと予測したのだが、しかし、日清戦争後の内村の目に映じたものは利欲と掠奪にふける日本人の姿であった。彼は日清戦争後に記した「時勢の観察」（『国民之友』309号、1896年）で「戦局を結んで戦捷国の位置に立つや、其主眼とせし隣邦の独立は措て問はざるが如く、新領土の開鑿、新市場の拡張は全国民の注意を奪ひ、偏に戦捷の利益を十二分に収めんとして汲々たり」と国民の貪婪な様子・道徳的退廃を綴って、自己の不明を恥じた。さらに加えて、「余輩の如き馬鹿者ありて彼らの宣言〔「日清戦争は義戦との主張」を真面目に受け、余輩の廻らぬ欧文を綴り「日清戦争の義」を世界に訴へたその軽率な言論活動を陳謝し、自らの判断の誤りを天下に明らかにしている（『内村鑑三全集』3、233頁）。

このように、日清戦争を義戦とした不明は戦争のもつ非道さ、戦争後に現われる日本人の道徳的退廃などについて考究させ、その後の緻密な聖書研究（『聖書之研究』を1900年10月に創刊）に彼を向かわせ、その研究をもって「非

戦と平和」について思索させていった。しかしその思索の成果を現わす時がきた。それは日露開戦の前年、1903年6月、『万朝報』に発表された「戦争廃止論」である。彼はこの時、京都、名古屋を經由して東京で精力的に執筆活動を行い、「聖書研究」をしていた。その彼が「戦争廃止論」で語る。「余は日露非開戦論者である許りでない、戦争絶対的廃止論者である、戦争は人を殺すことである、爾うして人を殺すことは大罪悪である、爾うして大罪悪を犯して個人も国家も永久に利益を収め得やう筈はない」（『内村鑑三全集』11、岩波書店、1981年、296頁）と。

彼は日本国家・国民の「一時的」な利害得失を超えて、「永久に」意味をもつ「いのちの尊重」及び「人殺しは大罪悪だ」という視点から、「戦争絶対的廃止」を唱えた。ここには、辛酸をなめてきた内村の実体験から、「弱く、小さな者たち」が切り捨てられ、犠牲とされる処からもたらされる「幸福・平和・進歩」は脆いものであり、人々を心の底から喜ばせるものでないと確信していた。さらに、内村は「小さく、弱い者たち」の救いに奔走するイエスの弟子として、また、あの『基督信徒への慰』に綴られた「路頭に迷う老婦、貧にある少女、孤児など」の慰めを促す「細き声」を聴く者として、犠牲を強いられやすい「弱い」彼等の幸福と平和を求めてものごとを考究・判断しなければならないと思念していた。

こうした前提にたつてもものごとを見つめ、判断する彼は如上の「戦争廃止論」を発表した2月後に表わした「露国と日本」（『万朝報』掲載）でも「露国にキシネフに於ける猶太人虐殺ありたればとて露国を以て人道の敵に擬する者がある、然し我儕日本人は日本にも足尾鉍毒事件と云ふ大惨事が存在して居ることを忘れてはなら

ない』（『内村鑑三全集』11, 372頁）と述べる。

彼は日清戦争以降、いかなる「人殺し」も「許される」ことはなく「大罪悪」だという認識にたっていた。さらに、その「人殺し反対」は渡良瀬川沿岸の惨状を目撃し、「いのちの尊さを後回し」にして、利潤を追求する近代国家（＝政商）の残虐性を目の当たりにして高まった。彼は「露国と日本」を書く2年前、渡良瀬川沿岸を訪ね、足尾鋳毒事件の惨状を目撃し、『万朝報』（1901年4月25日、26日、29日、30日に掲載）に「鋳毒地巡遊記」と題して記事を連載した。彼はその中で、「殆んど全く此政治と社会とに失望せる余は幾回か緘黙の中に残余の生命を送らんと決心せり、然れども茲に余の十数万の同胞が家を失ひ地を失ふを見て余は黙し能はざるに至れり（中略）悲しむ者は一府四県の民数十万人なり、喜ぶ者は足尾銅山の所有者一人なり、一人が富まんが為めに万人泣く、之を是れ仁政と言ふべき乎。（中略）優勝劣敗は実に人道なる乎、新文明とは実に如斯き者なる乎、王政維新の結果は終に茲に至りし乎」（『内村鑑三全集』9岩波書店、1981年、157-158頁）と述べた。内村は、「近代文明国家」を目指す日本、戦争に勝利して世界の1等国となろうとの大望をもつ日本が「弱い者たち」を泣かせ、「弱い万人」を犠牲にして進歩・発展を遂げようとする「優勝劣敗路線」を選び、走ることに怒りと絶望を抱いた。しかし、彼は平和を求めるイエスの弟子として「基督と愛国」をかかげ、日本国が「いのちを尊び」「平和を求める」国家となることを求めて、これまで続けてきた言論の筆を折ることができないと誓った。

けれども、日露戦争勝利後の日本は相変わらず彼の願いに反し「平和を求め、いのちを尊ぶ」国家に変わっていかなかった。日露戦争の勝利は日本人から「誠実の念」を奪い去り、敵愾心

旺盛な国民としていった。また、この戦争で死傷者が25万人もでたという事実より「人命軽視」が強まり、「人命を貴ぶの念」が失せだした。彼は日露戦争後に表わした「日露戦争より余が受けし利益」（『新希望』69号所収、1905年11月）で言う。「戦争は飽き足らざる野獣であります、彼は人間の血を飲めば飲む程、更らに多く飲まんと欲する者であります（中略）是れでも戦争は好いものであると言ふのでありますか、是れでも非戦論は非なりと言ふのであります乎」（『内村鑑三全集』13岩波書店、1981年、404頁）と。

内村は「いのちの尊さ」を顧みず、「殺し、奪う」ことを諒とし、他国を侵略・荒廃させ、敵愾心をあおる害毒の戦争を是とする日本国家の有り方と向き合い、日本の変革を求めるためにキリストともに働かなければならなかった。それは日本とその国民が絶望でなく希望、殺しあいではなくいのちの尊重、戦争推進でなく世界平和の牽引役を果たす存在に変えられるまでの活動を意味している。そして彼はかかる変革は神の導きとキリストの福音の伝播・受容によって起こるだろうと信じていた。彼がかかげる「基督と愛国」はこの国が基督の精神に満たされたものとなり、世界を平和と幸福に導くものへと変貌することを求めるものであった。そしてこの祈念を表わす「出征軍を送りて感あり」、日露戦争最中の1904年3月発行の『聖書之研究』50号に掲載されたこの文章より、内村がいかに日本中に「平和といのちの尊さ」が広まることを望んでいたのかということを見ておきたい。

嗚呼、我れ如何にして戦争を廃むるを得んか、我は如何にして是等無辜の良民を敵弾に曝らすの惨事を止むるを得ん乎、彼等を失ふて孤独に泣く老嫗あるに非ずや、彼等に離れて饑寒に叫ぶ寡婦と孤児



とあるに非ずや、之を見て泣かざる者は人にして人に非ず、我は人が万歳を歡呼するを聞いて其声に和すること能はざりき。/ 我れにして若し王者ならん乎、我は無理にも戦争を圧止せんものを（中略）然れども微弱なる我れ、我に唯、泣くに涙あり、祈るに言葉あるのみ。嗚呼、我れ如何にして戦争を廢むるを得んか。/ 福音を説かんのみ、然り、キリストの平和の福音を説かんのみ、而して一日も早く天国を此世に来らせんのみ、是れ我の為し得ることにして、亦無効の業にあらず、今の時に<sup>あなつ</sup>方て不可能事を企て、直に戦争を廢せんとするも何の益かある、人々其心に神の靈を宿すに至るまでは戦争の聲は歇まざるべし、キリストに在りて一人を救ふは戦争の危害を一人丈け減ずることなり、而して戦争は非戦論を唱へて止むべきものに非ずして、キリストの福音

を傳へて廢すべきものなるべし、嗚呼、我は覺れり、我は千百年の将来を期して、我が目前に目撃する惨事を根絶せんために我が世に在らん限り更らに熱心にキリストの福音の宣伝に従事せん。（『内村鑑三全集』12岩波書店、1981年、99-100頁）

内村は戦時下であっても、希望をもって平和の福音を伝え続けると述べる。彼は日清、日露の戦争惨事を目撃し、悪と罪に染まった人々の心が大きく悔い改められないかぎり、戦争はなくなると知った。それ故、彼は「小さく、弱い者たち」とともに平和を求め、希望をもって「この世にある限り」平和の福音を伝え、神に一つひとつのいのちが尊ばれるように祈ると言う。そして日本がいつの日かキリストによって平和の国家へと変えられ、平和を世界に顕わす国家となることを望み、宣教活動に勤しむと語る。